

◆一条条間路の調査—第293-7次

1. はじめに

個人住宅改築にもなる調査。発掘面積は約12m²。法華寺の北を走る一条条間路の左京域西端に近い位置であり、その北側溝の検出を試みた。

2. 調査の成果

調査の結果、幅2.3m以上の東西溝1条（SD1140）、それに流れ込む南北溝1条を検出した。

一条条間路北側溝とされる東西溝は、本調査区より東方の第82-8次、第164-14次、第95-2次で検出されている。

本調査で検出された東西溝もこれら既往の成果から想定される位置にほぼあたることから、一条条間路北側溝と考えられる。なお、南の溝肩は調査区外にあり、正確な位置を確定できなかった。

東西溝には、炭化物を多量に含む層がみられ、土器、燃えさし等が多数出土した。

(加藤真二)

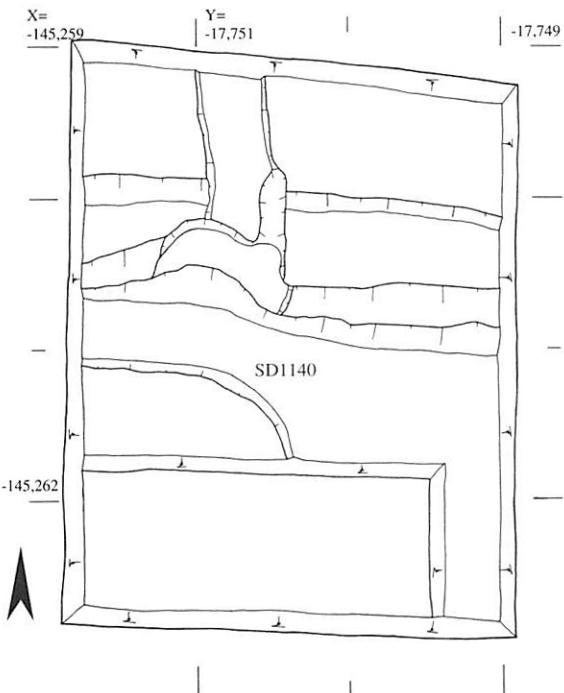


図76 第293-7次調査 遺構平面図

平 城 専 こらむ 櫛 ④

◆仏蘭西ワールドカップ珍道中

1998年スポーツ界最大のイベントといえば、なんといっても4年に1度のワールドカップ。われら日本代表チームは、そこそこ活躍するかも？という淡い期待をみごと裏切り、終わってみれば三戦全敗の勝点ゼロ。なんともさびしい結末がありました。それにも、あのジョホール・バルの決戦でイランを撃破しW杯初出場を決めた翌日、驚喜・乱舞のうえに「本戦には必ずや応援に駆けつけるぜ」と豪語した奈文研のサッカーチーム員たちは、本戦が近づ

くや露骨に尻ごみし、結局、はるか仏蘭西南部の古城トゥールーズにまでかけつけたのは私とNとMの3人だけ。ところがこの3人、出国直前に勃発した「幽霊チケット騒動」にまきこまれ、とうとうスタジアムには入れずじまい。3人なかよく、河川敷の特設スーパー・ヴィジョンで、日本対アルゼンチン戦を観賞したのであります。

でも、楽しかった。日本がW杯に出場したら本戦を見にいこうと心に決めていた私は、歳四十をすぎて、ようやくその願いを叶えられたのです（おかげで発掘現場をさぼり、同僚の結婚式もすっぽかしてしまったけれど）。じつ

は私とNの二人は、イングランド対チュニジア戦のチケットをちゃんと確保していて、日本戦の直後にマルセイユへ移動し、かのヴェロドロームの極上の席に座っていたのです。マルセイユの町はスキンヘッドのフーリガンとチュニジア民族衣装の埠堀と化し、そのなかに身をおいたぼくらは、ただハムサンドをかじりながら騒動をながめるだけだったけれども、それが楽しくてしかたなかった。

4年後はどうするんだって？ もう決めてるよ。済州島のスタジアムで、デンマーク対パラグアイの試合を見るんだから。

(A)

表10 その他の調査

調査次数	地 区	概 要
293-1	法華寺旧境内地	南北4m、東西7m、28m ² の長方形の調査区を設定。近代の溝、土坑を確認。近世以降の陶磁器が出土。
293-2	宮西面塙地・西一坊 大路東側溝	南北4m、東西3.5m、14m ² の調査区を設定。西一坊大路東側溝の東半（約1m幅分）と塙地を検出。東側溝から丸瓦5点0.4kg、平瓦10点0.5kgが出土。
293-5	宮北辺	南北6m、東西4m、24m ² の長方形の調査区を設定。耕土直下10~20cmで全面地山。遺構無。
293-9	宮内、若犬養門東方	東西3m、南北7m、21m ² 、小穴1基、土坑1基、土器・瓦少量。
293-11	宮北面大垣	南北3m、東西6m、18m ² の長方形の調査区を設定。東半に奈良時代の瓦を含む整地土層、西半に近代までの池の護岸を検出。奈良時代の瓦片、近世以降の陶磁器が出土。

●大極殿のいしづえ？ —寄贈礎石の紹介—

本資料は、平成11年春、奈良市高畠在住の石崎直司氏から本研究所へに寄贈されたものである。氏の開業する医院の建て替えにともない、灯籠の台座として使用していた礎石の寄贈を、別の礎石資料2点とあわせて申し出られたのであった。資料は平城宮跡資料館の南側敷地内に設置している。

この礎石は、平城宮跡保存に功績のある棚田嘉十郎が佐紀村から調達し、石崎直司氏の曾祖父の石崎勝蔵氏に贈ったと語り伝えられ、当時の記録も残る。氏は宮跡の顕彰に尽力し、正倉院文書の関係でも知られる。この経緯から、平城宮で使用された可能性が高いと判断され、ここで紹介する。

礎石は、全体の平面形が三角形に近く、2側面に自然面を残す。転用時に打ち欠いた部分があるが、

おおよその原形は窺える。法量は長さが地覆方向に200cm、幅は136cm、厚みは現存部最大で78cm。石材は花崗斑岩とみられる。

上面に円形の径105cmの柱座が作り出され、礎石長軸方向に地覆座が延びる。柱座上面には地覆座から続くわずかな段が円弧を描き、内側が柱を受ける部分であったことを示す。推定柱径は約87cm。地覆座は左右で幅が違い、狭い方は約49cm、対し反対は81cmと広いので、本礎石の片側に門などの施設が想定できる。柱座中央部分に径約32cmの出ほぞがあったことが、表面に残る円形の敲打痕から知られ、この形状は同時に寄贈いただいた礎石資料のうち、大きく改変されているが同巧の礎石を参考にできる。

以上が概要であるが、礎石自身

の大きさと柱の径から、巨大な建築物を想定せざるをえない。宮内でそれに見合う礎石建物の数は限られ、先の由来から大極殿が有力候補の一つとなる。ちなみに、第一次大極殿が移築されたといわれる山城国分寺金堂の礎石と比べると、石材は異なるが柱座の径は一致し、上面の加工や柱の当たりの径などは塔の礎石と一致する。従って、本資料が大極殿、とくに第二次大極殿の礎石であった可能性を考える必要がある。十分な資料集成の上に慎重な検討が必要ではあるが、この想定が裏付けられれば大極殿建物の基壇高や建築様式の推定に不可欠な資料になる。

最後に、本資料の石崎氏からの寄贈にあたって藤森友和氏、猪熊兼勝氏のご助力があったことを明記しておく。

(高橋克壽)



図77 寄贈礎石写真

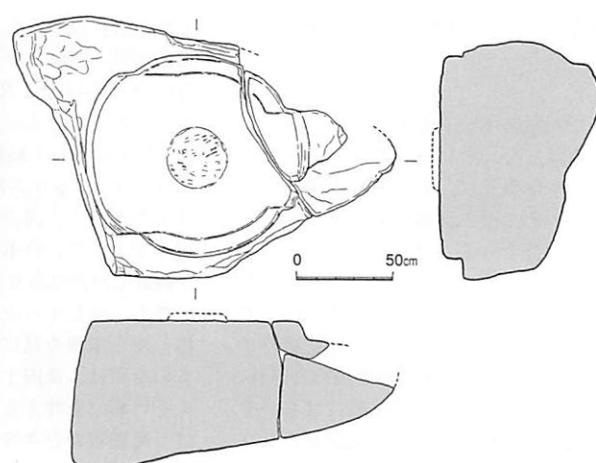


図78 寄贈礎石実測図 1:40